

幼稚園における問題児の研究



日名子 太郎

幼稚園の現職教員に、現在、最も研究したい問題は何かということをとらずねてみると、

(1)音楽リズム、絵画製作に関するもの

(2)問題児に関するもの

といったふうに、第二位を占めている。これは、第一位の実技面に関する研究と、一見異なるように見えるけれども、実は、日常子どもを保育していく上で、教師にとってもっとも関心があり、同時に頭痛の種となっているという意味において、同じ種類のものといえよう。

さて、そこで、現場の若い、経験の浅い教師が、自分の担当する組で問題行動のあるように思われる子どもを発見し、保育しようとする場合、たいてい、

(1)あの手、この手と試行錯誤的にやってみる。

(2)先輩の教師などの助言を得る。

(3)問題児に関する本を読む。

(4)相談所などの門を叩く。

といった方法をとるのが普通であろう。もちろん、これらは、明瞭に分類されるべきものではないが、多分に試行錯誤的な要素の介入することは否定できない。ところが、普通、問題児などに関してかいた本は、どうしても、一般的、体系的にならざるを得ないため、経験のないものが読んでも、なかなか理解し得ない点が少ない。すなわち、肝心の所が、本当につかめないものなのである。また、たとえ先輩にたずねても、先輩は、「私は、このような場合、……しました。」とは教えてくれない、それは、過去に、その方法が、その先輩の保育したある特定の子どものみには通用したが、今度の子どもの問題に、必ず通用するとは限らぬこと

が少なくない。その結果、若い保育者は、どうにも手の施しようがなくて、ただ手を挟んでいることになってしまふ。この場合問題が、その子ども自体に止っていて影響のない場合はまだよいけれども、周囲へ何らかの悪影響を与えるようなものでは、いたずらにすておくことはできない。このようなとき、教師としては、全く苦しい破目においこまれ、どうしたらよいのかと神経質になることも無理からぬことであろう。

問題児のもつ問題の多くが、その子どもの家庭に原因していることが少なくないことは、衆知のとおりである。前記のような教師の中には、その問題が、日常の保育によって解消されるにもかかわらず、原因は家庭にあるからという点に、すべてを委ねて、その問題を回避していることがある。この反面、園内の一保育者の手では、なかなか解決の困難な問題に、一生懸命に取り組んでいることも見上げられる。しかも、それがたまたま器質的な障害であるようなとき、この教師の態度は、一応立派なように見えても実は、認識不足のための全く無暴に近いものといわなければならぬと思う。このように考えてくると、教師にとつては、いろいろな問題をもつ子どもを保育する経験が、極めて大切なように思われてくるし、従来、経験者が尊ばれたのも、このような観点からであったと思う。それにもかかわらず、筆者は、前にも記したことがあるように、この種の経験至上主義を、再びここで

排したのである。

そこで、このような経験主義の先輩に反感を感じている若い教師のよりどころとなるのは、前にもあげた問題児に関する参考書であることが多く、これらの本によって、彼らは、一応、問題児というものについての概念を整理し、理念的に体系づけることには、ある程度、成功するものなのである。例えば、幼稚園で口をきけない子どもは、何故なのかとか、おねしょ（夜尿症）は、案外心理的原因から生ずることが多いとかいったふうな知識を得ることには成功する。だからといって、それで問題は解決するわけではない。依然として、その教師の前には、「園では口のきけない子ども」、「夜になるとおねしょをして親をなやませる子ども」が存在している。かくして、参考書も、多くの現場の教師からは、いわゆる役に立たないものと決めつけられてしまふのである。では、一体どのようにしたならばよいのであろうか。この点について、以下述べていこう。

(一)まず、普通の子どもの生活、行動についてじゅうぶんに理解するようにすることが、問題を正しく把握することとなる。

問題児とは、今更いうまでもなく、何らかの原因で、異常な問題の行動をする子どもの総称であるから、普通児と比較して、何らかの差異があるはずである。しかし、その差異を知るのには、

*「現場における研究について」幼児の教育、第五十八巻、第八号第十九頁参照

まず普通の子どもについて、じゅうぶんに知っておかなければならない。母おやなどの中には、よく自分の子どもだけしか眼中にないため、発達の遅れているのに気がつかないような人が少なくないが、これは基準というか、比較対照すべきものを知らないからである。逆に、何でもかでも問題としてしまう人も少なくない。我々は、まず一般の子どもの生活行動について理解しておくことが大切である。

(二)「問題の徴候」とは、何を指すかを、よく知っておかなければならない。

チックとは、一体どんな徴候なのか、吃音とは、どのような徴候なのか、またその軽重は、どう異なるのかというふうなことをよく知っておかなければならない。そのためには、見学など極めて有効であろう。

(三)問題発生メカニズム(仕組み)はどのようであるかを一応つかんでおくこと。

心身両面における問題発生メカニズムについて、一応知っておくことが必要である。その意味で原理はやはり大切である。

(四)問題の程度によって、それが、園だけの力で解決できるものか否かを判別する力を養うこと。

園だけで解決できる範囲は、通常極めて限られている。どの程度まで、各自の園で解決可能かを知っておくと同時に、少しでも

各自の能力、各園の保育能力を高めるよう努力してほしい。このために、園内で、問題児などに対する処置などに関しては、全員が協力できるような体制をとるよう努めておくことが望ましい。

(五)家庭の指導に関して、日常から、たえず配慮しておくこと。

問題が発生してから、急に、園とその家庭との間のラポート(心理的融和)を高めようとするようなことにならないように注意しなければならない。そのためには、全園児の家庭が、常に園側と相互理解の上に立てるよう、連絡について考えておくことが大切である。

(六)園の保育が、問題を解消するどころか、問題発生の原因とさえなりかねない場合も少なくない。

この点、少なくとも保育全般が、このようなよい形態、内容をとりに得よう全員で研究改善していかなければならない。

(七)個人保育と集団保育のそれぞれの長所を利用できる体制が、常に考えられていることが必要である。

筆者は、自己の園で、しばしば、個人保育をおこなってから、集団保育へ編入して問題を解消していることを体験しているが、同時に、グループ保育の持つ保育効果(ないし治療効果)にも、しばしばみのがすことのできない特質を発見できるのである。これらを随時使いわけることが必要である。

(八)問題児の保育ということとは、保育技術の中の重要な分野である。

しかし、決して、一般児の保育と別個に存在するものではない。これらが表裏一体のものであるということを確認しなければならぬ。

以上、問題児のとり扱いにおける保育者、ならびに園としての配慮すべき原則を列記したのであるが、次に、一、二の事例をあげてみよう。

〈事例・一〉⁽¹⁾ 社会性の欠けていたM君が、グループ保育で問題が解消した場合。

彼、M君は、現在、二年保育年長組の男子、今日全く問題は解消してしまっているが、昨年度は、二年保育年少組の中では、最も社会性の欠けた園児であった。友だちと遊べず、年中、運動場をあっち、こっちするだけで、傍観的である。また、ちょっとしたことで、すぐ泣き、教師にすがりつき泣きじゃくる。さらに、舌を出したり、顔をしかめたりする、いわゆるチックがかなりひどい。家族は、父（当時三才）、母（当時二三才）、本人で、ひとりっ子のせいもあり極めて過保護である。ハサミが全く使えない。偏食あり。毎週一回、この種の幼児のみを集めたグループ保育を中心とした特別保育を一年間続けるとともに、担任を通じて家庭における保育の指導をし、少しでも自立性を高めるべく配慮。効を奏して、社会性に関する面ならびにチックについての問題は、一

応解決している。しかし、最近実施した知能検査では、知能指数をあげると、

〔団体検査（幼児用田中B式）七三

個人検査（鈴木・びねー式）九六

で、その差が二三となり、団体場面における問題が全く解消されていない。

〈事例・二〉⁽²⁾ 拒食癖を伴なう社会性を欠く H子ちゃんが、日常の保育で問題を解消してしまつた場合。

Hちゃんは、六人家族の一員で、父、母、妹、祖父、祖母の中で暮らす。園では、表情が固く、友だちと全く遊べない。二年保育年少児の頃、おべんとうの時間、保育室の入口の戸のところにとまわりつき、おべんとうをたべようとしなない。家庭では過保護で、とくに祖母が甘く、問題についての意識もほとんどない。前述のM君と一緒にグループ保育も、なかなか出席せず、結局、じゆうぶんではなかったが、最近では、全く表情が変化し（明かるく、子どもらしいゆるみがある）会話を遊びも活発であり、もちろん、拒食癖も自然に解消している。最近実施の知能検査では、

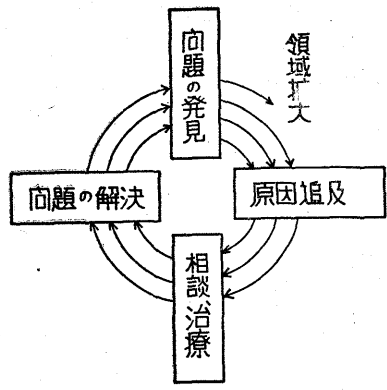
〔団体検査（幼児用田中B式）八八
個人検査（鈴木・びねー式）一一〇

で、その差は二二となり、やはり、団体場面における適応がよく

ないようである。

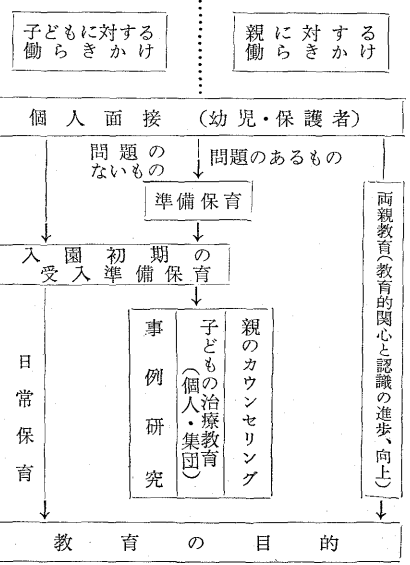
このような事例だけを読めば、その文面には現われない部分は、なかなか理解できない。しかし、いずれも前述の八つの原則を守っている結果として問題が解消されているのである。

結局、問題の発見、原因の追及、相談、治療、問題の解決は、左の図の如き関係にあり、次第にその領域を拡大していくものといえる。すなわち、問題の解決は、次の問題発見の視野、能力を拡大してくれる



第 1 図

ものなのである。
 なお、下の図は、本園で現在おこなっているカウンセリングの方式を示したものである。



第 2 図

- (注)
- (1) 東映教育映画「子どものくせ」二巻 平井、小泉、日名子編、栄光幼稚園協力参照
 - (3)、(4) 日本保育学会第十一回大会発表 日名子、「幼児の教育」第五十七巻、第九号参照

(私立栄光幼稚園長)